

純粹倫理に基づいた経営理念についての考察

理念策定における要点と社内浸透の一方法としての朝礼について

三浦 貴史（倫理研究所研究員）

はじめに

近年の経済のグローバル化、並びにボーダーレス化の進展は、市場の拡大をもたらし、企業間競争を激化させる一方で、企業に対して地球環境の「持続可能性 (sustainability)」を担保した活動のあり方を要請している。そのため、地球規模での経済倫理が問われ、企業倫理が厳しく求められる時代となった。人類はもはや個別の繁栄のみならず、全体のバランスのとれた発展、それを考慮した経済活動の確立を迫られているといえよう。

さて、一企業が、以上述べたような現代的状況を踏まえて活動しているか否か、そのことが端的に表現されたものこそ、経営理念に他ならない。企業にとって経営理念は、組織の存立基盤を示し、具体的な経営の方向性を決定する指標となる。それは往々にして、経営者の経営に対する信念や哲学を反映したものであるが、それだけに、経営者および経営陣等の理念策定者の考え如何によって、どのような企業体をも誕生せしめることができる。

ここで問題となるのは経営理念策定にあたって、その策定者が何を拠り所に自身の思想を構築したかということである。先述したような持続可能な社会の実現が求められる現代にあって、それは重要な倫理的課題といえる。

倫理研究所の会員組織の一つである「倫理法人会」は、このような時代状況に先んじて、昭和 55 年より「企業に倫理を」「職場に心を」という二つのスローガンを掲げて活動してきた。そこで実践される倫理とは、倫理研究所の創設者・丸山敏雄の提唱した純粹倫理を指す。

本稿の目的は、この純粹倫理に基づいた経営理念策定の要素と方法、また企業内への浸透方法としての朝礼について考察することである。しかしながら、倫理経営そのものの研究は未だ緒に就いたばかりであり、既存の学問分野から考察された先行研究はごく僅かであるといつてよい。将来、経営学、会計学、倫理学等の諸専門分野からの吟味、アプローチがなされるであろうが、本稿は、丸山敏雄の論考、遺稿並びに倫理研究所の歴代理事長の見解に依拠して、その基本的な考えをまとめた整理作業の一つに過ぎない。

本稿ではまず、丸山敏雄の理想の企業経営とは何かについて述べ、その思想的根源について指摘した。その上で、純粹倫理に基づいた経営理念の策定の際に、必要不可欠な基礎的要件についてまとめた。最後に、企業内において経営理念を浸透させる有効なツールとして倫理法人会が提唱する「活力朝礼」について触れ、その起源と特色に言及した。以上の作業を通して、丸山敏雄が理想とした企業、並びに事業経営というものの一端なりとも粗描できればと思う。